

インターネットのお仕事人辞典

若者の視点で伝えるオンリーワンな生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > ナビゲーター：藤本肇さん [在宅緩和ケア医]



[[English](#)]

仕事への厳しさと患者さんへの優しさ それをあわせ持つ柔軟さ

藤本肇さん
[在宅緩和ケア医]



取材日：2009年06月26日

ふじもとはじめ 1967年、兵庫県生まれ
幼い頃から医者への道を志し、防衛医大で自衛隊医官(じえいたいかん)や外科医としてご自身の道を探る中で、在宅での医療の必要性を感じ、緩和ケア医の道へと進んでいくことを決める。3年半前に、「ふじもと在宅緩和ケアクリニック」を開業し、まだ広まりの浅い緩和ケアという医療の考え方を様々な方向から人々に発信している。活動的な一面を持つ一方で、穏やかで落ち着いた雰囲気からはやわらかい人柄が感じ取れる。

▼オンリーワン・ワード▼

学生記者が本取材を通じて最も心に響いた言葉

やりがいがありすぎて止まらない

by 担当学生記者：辻瑞恵(19歳：取材時)



1. [実は身近な「在宅緩和ケア医療」](#)
2. [きっと、全部が今に繋がっているんです。](#)
3. [気付いていますか？家族の絆に。](#)
4. [自然が好き。自然と人の命に触れた、学生時代。](#)
5. [日本の緩和ケア医療は、現在進行形！](#)
6. [今の時代だからこそ、強い自分でいてください。](#)

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)
▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)
▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いた た オンリーワン・ワード 集



▼ [購入する](#)
▼ [詳しく見る](#)

Copyright © 1999 NPO 法人キャリアナビ All rights reserved.
network system + data center supported by Ekt-ise

インターネットのお仕事人辞典

若者の視点で伝えるオンリーワンな生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > インタビュー

[[English](#)]



1. 実は身近な「在宅緩和ケア医療」

<<PREV

NEXT >>

藤本さん：みなさんは、医学生や看護学生と交流したことはありますか？

記者（以下、記）：あまりないですね。

藤本さん：医学部、看護学部の学生が話を聞きにくることはあるんですけど、私の仕事を理解していただく上では、医学に接している、接していないという違いはあまり関係ないと思います。緩和ケアは他の医療より身近でわかりやすいので、あまり難しく考えず、みなさんの家族のことや人生について考えながら聞いてみてください。

記：はい！よろしくお願いします。

それでは、まず緩和ケアというお仕事は具体的にどのようなことをされているのか、教えていただけますか？

藤本さん：そうですね。医学や医療と言うと、みなさんの中では病気を治すというイメージがありますよね。だけど、医療には病気を治すことを目的とするもの、症状を和らげて患者さんの生活を守ることを目的とするもの、と2種類の支えがあるんです。やっぱり病気が治らない方だってたくさんいますよね。そういう人たちの症状を出来るだけ和らげることや、患者さんの生活を守っていくこと。それが私たちの行う緩和ケアの役割なんです。

病気を抱えている患者さんというのは、生活が自分1人では成り立たないときに、誰の助けを借りれば生活できるんだろう、これから自分がどうなっていくんだろうという問題と向き合っていくわけですね。それを私たちは家族の方と一緒に考えるんです。普通、病気を治すことを目的とした治療は、純粹に病原・症状に対していかに解決していくかを考えるんですが、それと同時に、患者さんご本人とご家族、みんなをくめて、彼らの生活を支えていこう、というのが私たちのやっている医療の中身です。



インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)

▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)

▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いた
オンリーワン・ワード集



記：在宅という形でやっているんですね。

藤本さん：はい。どこでやるかによって、在宅の緩和ケア、入院で行う緩和ケアに分かれます。ホスピスという言葉を知っていますか？最近では、入院施設であるホスピスを緩和ケア病棟と呼んでいます。一般の病院よりは、患者さんの暮らしの場所としての機能が重視されています。でも、やっぱり家というのはもともと患者さんとご家族の生活があった場所だから、病院よりも、そのご家族本来の生き方がとても実現しやすい場所なんですね。

記：私、身内がガンで亡くなっているんです。幼い頃でしたが、最期までずっと病院で治療をしていて、家に帰りたいと言っていたことを覚えています。

藤本さん：私も中学2年生のときに祖父がガンで亡くなっているんです。病院で暮らしている姿って、ときどきお見舞いに行ってはいるけど、ずっとは見れないですね。ガンにかかって入院しているという事実は知っていても会ったときのことしかわからないから、普段どういう風に暮らしていて、どこが痛そうにしているということが抜けている。そして、ただ亡くなったという事実がいきなりやって来る。私の中で、祖父の死はそんな感覚でした。それって、人間の命がだんだん変わっていく本当の過程を見れていないですね。いつの間にか人間の死が終わっている。みなさんの死に対するイメージや病気で誰かが亡くなることって、怖いとか、暗いとか、そういう方に偏っていると思うんですよ。ガンの治療は痛くて苦しいもの、死を待っているというイメージを持っているかもしれない。

だけど本当はそればかりじゃないんです。言葉にすると「死生観」というものだと思いますが、日本人は欧米に比べて宗教的な背景も違うから、なかなか普段そういうことを考えないですね。死に向かっているから単に苦しい、悲しいではなく、たとえばそういう痛みや苦しみをとってあげられれば、その時間というのは患者さんが『生きている』時間になるんです。よく、自分が何時間後に死ぬとしたら何をやりたいか、という企画をメディアでやってるじゃないですか。そういう風にするとみんな何をしますよね？そして、その時間を大事に使おうと思う。その大事に使おうって思う時間を、実際に在宅医療で実現しよう、ということなんです。病気にかかったことが自分の残された人生と向き合うきっかけになったわけですね。だから医療というよりは患者さんの生き様をどういう風来实现していくか、死へ向かうというよりいかに生き切るか、その究極の選択を患者さんと一緒にしていくこと、あなたのように患者さんの生き様をご家族の心の中に残していくことが緩和ケアの大きな役割なんです。

<<PREV

NEXT >>



[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > ナビゲーター：藤本肇さん [在宅緩和ケア医] > 学生記者の感想

[[English](#)]

学生記者の感想

▼担当学生記者

辻瑞恵 (19歳：取材時)

▼取材日

2009/6/26(金)

▼取材時間

19:00~20:30

▼取材地

ふじもと在宅緩和ケアクリニック

▼取材の雰囲気

当初、私たち学生記者はそのお仕事内容にそろってとても緊張していました。

そんな私たちの緊張を察してか、藤本先生はとてもやさしい空気を終始作り出してくださり、白を基調とした家庭を思わせる事務所で、穏やかな雰囲気のもと取材を行うことができました。



やりがいがありすぎて止まらない

担当学生記者： 辻瑞恵(19歳：取材時)

で自身の仕事について、そう語る藤本さんは本当に生き生きとしていて、仕事を楽しくやってらっしゃるんだと思いました。自分のやりたいことと仕事が一致しているから言うならば仕事が趣味であってストレスは溜まらない、お仕事内容を垣間見ているからこそ、そう言い切ることがすげえと思いました。今まで何人かのナビさんにも会ってきましたが、根本のところはみんな 変わらない、通じた考え方がある。それはたとえ一見かけ離れているように見える 職業でも同じなんだということが、今回の取材を通して改めてわかりました。理系で、今まで医療系など全く交流のなかって私にとって、この取材を通して聞けたお話はすべて新鮮で刺激的なものでした。そのなかでも藤本さんにお話を伺えたことを光栄に思います。本当にありがとうございました。

死をただ暗いだけのものと思わない

同行学生記者： 山本真理子(21歳：取材時)

取材は、本当に貴重なお話ばかりで、そして始終なんだか温かい時間が流れていたなと私は感じました。オンリーワンの言葉を聞いたとき、私は本当に本当に驚きました。私にとって、死は当然暗いものであるという固定観念があったからです。今まで私が見てきた“死”はとても暗くて、悲しくて、立ち直れないものばかりでした。しかし、藤本さんのお話を伺っていると“死”の違う側面が見えだしてきました。緩和ケアの患者さんは、残された人生を、家族とのんびりと一瞬一瞬を大事にかみしめるように過ごしているのだなと感じました。いつか“終わり”があるからこそ、本人やその家族は、色々なものの大切さや本当に大事なものがクリアに見えてくるのかもしれない。このような貴重なお話が聞けたこと、本当に感謝しています。ありがとうございました。

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)

▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)

▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いたオンリーワン・ワード集



打たれたときに支えてくれる人を見つける

同行学生記者： 渡辺早紀(22歳：取材時)

藤本さんは緩和ケアの仕事は、楽しくて趣味のようにやっているとおっしゃっていました。人の死を最後に看取るというお仕事の方からそのような言葉がでてくるのが、とても驚きました。死を暗いものに考えるのではなく、時間を大事に最期に何が出来るかを家族で考えて、たくさんの思い出を作って皆で送り出すというその過程に喜びを見出している方でした。

そんな藤本さんは、仕事で辛いときに弱音を聞いてもらえる先輩だったり同僚だったり家族だったり 仲間を見つけるといい、とおっしゃっていました。そういう人たちが私の周りにも今いてくれることが本当に有難いし感謝の気持ちが溢れてくるし、その人たちを大事にしたいと本当に思いました。

インターネットのお仕事人辞典

若者の視点で伝えるオンリーワンな生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > インタビュー

[[English](#)]



1. 実は身近な「在宅緩和ケア医療」

<<PREV

NEXT >>

藤本さん：みなさんは、医学生や看護学生と交流したことはありますか？

記者（以下、記）：あまりないですね。

藤本さん：医学部、看護学部の学生が話を聞きにくることはあるんですけど、私の仕事を理解していただく上では、医学に接している、接していないという違いはあまり関係ないと思います。緩和ケアは他の医療より身近でわかりやすいので、あまり難しく考えず、みなさんの家族のことや人生について考えながら聞いてみてください。

記：はい！よろしくお願いします。

それでは、まず緩和ケアというお仕事は具体的にどのようなことをされているのか、教えていただけますか？

藤本さん：そうですね。医学や医療と言うと、みなさんの中では病気を治すというイメージがありますよね。だけど、医療には病気を治すことを目的とするもの、症状を和らげて患者さんの生活を守ることを目的とするもの、と2種類の支えがあるんです。やっぱり病気が治らない方だってたくさんいますよね。そういう人たちの症状を出来るだけ和らげることや、患者さんの生活を守っていくこと。それが私たちの行う緩和ケアの役割なんです。

病気を抱えている患者さんというのは、生活が自分1人では成り立たないときに、誰の助けを借りれば生活できるんだろう、これから自分がどうなっていくんだろうという問題と向き合っていくわけですね。それを私たちは家族の方と一緒に考えるんです。普通、病気を治すことを目的とした治療は、純粹に病原・症状に対していかに解決していくかを考えるんですが、それと同時に、患者さんご本人とご家族、みんなをくめて、彼らの生活を支えていこう、というのが私たちのやっている医療の中身です。



インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)
▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)
▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いた
オンリーワン・ワード集



記：在宅という形でやっているんですね。

藤本さん：はい。どこでやるかによって、在宅の緩和ケア、入院で行う緩和ケアに分かれます。ホスピスという言葉を知っていますか？最近では、入院施設であるホスピスを緩和ケア病棟と呼んでいます。一般の病院よりは、患者さんの暮らしの場所としての機能が重視されています。でも、やっぱり家というのはもともと患者さんとご家族の生活があった場所だから、病院よりも、そのご家族本来の生き方がとても実現しやすい場所なんですね。

記：私、身内がガンで亡くなっているんです。幼い頃でしたが、最期までずっと病院で治療をしていて、家に帰りたいと言っていたことを覚えています。

藤本さん：私も中学2年生のときに祖父がガンで亡くなっているんです。病院で暮らしている姿って、ときどきお見舞いに行ってはいるけど、ずっとは見れないですね。ガンにかかって入院しているという事実は知っていても会ったときのことしかわからないから、普段どういう風に暮らしていて、どこが痛そうにしているということが抜けている。そして、ただ亡くなったという事実がいきなりやって来る。私の中で、祖父の死はそんな感覚でした。それって、人間の命がだんだん変わっていく本当の過程を見れていないですね。いつの間にか人間の死が終わっている。みなさんの死に対するイメージや病気で誰かが亡くなることって、怖いとか、暗いとか、そういう方に偏っていると思うんですよ。ガンの治療は痛くて苦しいもの、死を待っているというイメージを持っているかもしれない。

だけど本当はそればかりじゃないんです。言葉にすると「死生観」というものだと思いますが、日本人は欧米に比べて宗教的な背景も違うから、なかなか普段そういうことを考えないですね。死に向かっているから単に苦しい、悲しいではなく、たとえばそういう痛みや苦しみをとってあげられれば、その時間というのは患者さんが『生きている』時間になるんです。よく、自分が何時間後に死ぬとしたら何をやりたいか、という企画をメディアでやってるじゃないですか。そういう風にするとみんな何をしますよね？そして、その時間を大事に使おうと思う。その大事に使おうって思う時間を、実際に在宅医療で実現しよう、ということなんです。病気にかかったことが自分の残された人生と向き合うきっかけになったわけですね。だから医療というよりは患者さんの生き様をどういう風来实现していくか、死へ向かうというよりいかに生き切るか、その究極の選択を患者さんと一緒にしていくこと、あなたのように患者さんの生き様をご家族の心の中に残していくことが緩和ケアの大きな役割なんです。

<<PREV

NEXT >>



若者の視点で伝えるオンリーワンな生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > インタビュー

[[English](#)]

2. きっと、全部が今に繋がっているんです。

<<PREV

NEXT >>

記：先ほど藤本さんのおじいさんもガンで亡くなったとおっしゃいましたが、医者になろうと思ったきっかけには、やはりそのようなことが関係しているのでしょうか。

藤本さん：そうですね、きっかけはたくさんありますが、それも1つにあります。

医者になろうと思ったのは小学生の頃からです。私の姉が知的障害児（注1）で重い自閉症だったので、子供の頃は友達から姉の病気のことを言われていました。姉の病気を治せれば、と思ったのが一番始めにあるきっかけです。

緩和医療に入ろうと思ったのは、大学を出て研修医の頃に、再発した患者さんの痛みの治療について、勉強して発表をしたことがきっかけです。ガン告知の問題や、術後のQOL（注2）を大事にする外科の医療はどういうことなのか、ということはずっとテーマにしてきました。そうしているうちに、このテーマが私のライフワーク（注3）になりました。また、医者になったとき同僚のナースが、若くして舌ガンで亡くなってしまったんです。そういう経験もあわせて、本気で緩和医療に取り組もうと思いました。

何年も外科医をやっていると、死期の近い患者さんといかに向き合うかという中で、だんだん緩和ケアの先生たちに頼むことが増えてきました。たまたま近くに緩和ケアの病棟が3ヶ所あったので、そこの先生とやりとりもしました。そんな中やっぱり入院は嫌だっという人がいたんです。在宅の先生はととても少ないので、家に帰りたく願う患者さんをどうやったら家で診てもらえるのかなとすごく悩みました。

最初に在宅で治療することになった患者さんが病院を退院するときに、私も一緒に家まで行かせてもらったんです。そのとき初めて在宅の緩和ケアの存在を知りました。あいさつをして、言葉を交わして、この人すごいなと、その先生にとっても感銘を受けました。それから、少しずつその先生の往診について回るようになったんです。そうしてしばらく学んだあと、在宅の緩和ケアを行う先生が本当に少ないので、じゃあ自分でやろうと思い、外科医を辞めて今の診療所を始めました。今では、外科の先生から患者さんを紹介されることもあるので、立場は逆になりましたね。

記：そうなんですか。お仕事を变えるのに、すごくエネルギーは使いませんでしたか？

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

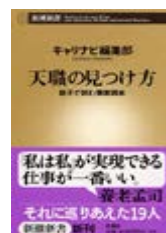
▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)
▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)
▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いたオンリーワン・ワード集



藤本さん： 外科にいながらずと自分で取り組んできた、ライフワークの延長上の仕事だから、ごく自然な流れでしたし、外科医を辞めるということにもそんなに抵抗はなかったです。今振り返っても、外科をやっていたからこそ、この仕事があるし、すごく外科医時代の経験が活きていると思います。メスを握っているか握っていないかだけの違いで、診ている患者さんは同じです。見た目は変わっているけれど、やっていることは自分の中では一貫しているんですね。

(注1) 知的障害児...一般的には読み書き、計算などといった日常で使う言語や学習の知的機能に障害があるとされる子ども。

(注2) QOL...Quality of lifeの略。個人の生きがいや、生活の質を大切にしていこうという考え方。

(注3) ライフワーク...作家や研究者、表現者たちが人生をささげたテーマ。天職。

▼ [購入する](#)
▼ [詳しく見る](#)

<<PREV

NEXT >>



若者の視点で伝えるオンリーワンの生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > インタビュー

[[English](#)]

3. 気付いていますか？家族の絆に。

<<PREV

NEXT >>

記： 緩和ケアを始めるときに、患者さんとご家族で意見が合わないことはありませんか？

藤本さん： はい、あります。でも、患者さんが在宅を望んでいるのになんで家族は反対するのかというと、大体の場合は病院にいることの方が安心だという気持ちが強いからなんです。患者さんも家族に迷惑をかけたくないという、お互いの気遣いと遠慮（えんりょ）の中で在宅が難しく捉えられている場合は、その不安がどうやったら解決できるかということ、在宅ケアを始める前にできるだけ複数のご家族の方に来ていただいて、きちんとお話をします。だけど、ご家族の中で病気の患者さんを見るのが嫌だという方もいる。たとえば、それまでの家族関係での仲の良さなどの問題があったら無理はできないと思います。だからきちんとご家族の意見を聞いて、無理だということも結論としてはありうるんですね。でも、ご家族の方が本当に見てあげたいという気持ちがあるならば、解決できる糸口はいっぱいあると思います。

記： やっぱり家族の仲や絆の大切さというのは、家族の普段からの生活によって変わってくるんですね。

藤本さん： そう思います。だから、家で支えてもらえる方はすごく幸せな方だと思うんです。この時代、みんなが大変な思いをしてやりくりして支えてくれるわけだから。

私たちの世代になると、男性は優しくなってきたと思うんですが、昔の男の人って奥さんに何かしてもらって当然という思いが少なからずあるじゃないですか。病気になって支えてもらうときにも、偉そうにしゃべってしまったりする。それでも、ご家族は一生懸命支えてくれる。それは、一見頑固そうに見えていても、やっぱりそれだけ患者さんがご家族に愛情を注いできたからこそ、お返しをもらってるんだろうなってよく思います。ああ、家族って大事だなって、患者さんから教わることがたくさんあります。

若い患者さんですと私と年齢があまり変わらないので、自分自身を振り返させられますね。もしかしたら私も突然病気にかかって、もう子供とそんなに遊んでやれないかもしれないと考えてみたり。3年半やってきたなかでそんな思いが強まって、今年の夏は子供と過ごす時間をもう少し増やそうと思っているんです。

記： 特に印象に残っている患者さんはいらっしゃいますか？

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう！！](#)（ぜひ、お聞かせください）

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)
▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)
▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いたオンリーワン・ワード集



藤本さん：誰が残っているというよりは、本当に1軒1軒にストーリーがあるんですよ。在宅ケアは患者さんの家にうかがうので、私たち自身が家族のなかに入って行くような感じなんです。年齢的にも親に近い世代の患者さんをいっぱい診ているから、患者さんを診ているというより親を看ている、医療職と患者さんという関係でなく、家族関係をどうしていこうかと考えていることのほうが多いです。

たとえば、女性だと特に身だしなみにこだわるので、自分が死ぬときはこういう化粧で何を着せてほしいという話をご家族の方にする人もおられるんです。自分の死期が迫っているけど、だからといって怯えているだけでなく、自分がどうしてやって最期まで生きたい、そのあとにはどうありたいということまで含めて考えられる。患者さんの意思をご家



族にちゃんと話せる環境を、私たちも作れるように努力します。患者さん自身が落ち着いて意思表示をしてくれると、誰よりもご家族がとても楽になるんですよ。つらいのかな、どう考えてるのかなと、患者さんの思っていることがわからないままお別れしてしまうと、後になって心配事が残ってしまうんです。だけど患者さんが意思表示をしてくれると、ああ、本当にこうやって考えていて、その通りやってあげられたなと思える。別れた後の余韻が全く違って来るんですよ。私の仕事をしていると、こういう患者さんとよく出会います。

記：私の亡くなったおじいちゃんも、最後におばあちゃんに手紙を書いていたのをおぼろげに覚えています。そこにも、自分のお葬式（そうしき）のことや祖母へも感謝がとても細かく書かれていたようです。

藤本さん：お互いに話せる環境を作ることが出来れば、きっとみんなご家族に向けたメッセージをちゃんと残してくれるんですよ。そのメッセージを残さずに旅立ってしまう方はまだまだたくさんいるけど、1人でも多くの方にちょっとしたきっかけをうまく作って、ご家族の中でずっといい形で残るようにしていきたいです。それが、こういう時期に関わる緩和ケアがすべきことであり、ご家族を本当に支えていくことだと思うんです。

<<PREV

NEXT >>

インターネットのお仕事人辞典

若者の視点で伝えるオンリーワンな生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > インタビュー

[[English](#)]



4. 自然が好き。自然と人の命に触れた、学生時代。

<<PREV

NEXT >>

記： 学生時代にはどのようなことをなさってたんですか？

藤本さん： 自転車や写真、オリエンテーリング（注1）などが好きでやっていました。自転車のサークルを作って日本中を走り回っていましたね。だから患者さんといろいろなところの話をするのが大好きで、そういう話で盛り上がるのがとても楽しいんです。

記： へえ～！自転車でどこまでいけるかやってみたいんですけど（笑）。自分探しの旅みたいなことを。

藤本さん： やるといいと思いますよ。

学生するとき、アメリカ大陸横断を企てたことがあるんです。それは実現できなかったんだけど、やればよかった。でも九州や四国一周は走破（そうは）しました。

記： 九州一周ってすごいですね。もともとのご出身はそっちの方なんですか？

藤本さん： 兵庫県です。瀬戸内海ののんびりしたところ。だから私ものんびりしているんですね（笑）。だから、自然が好きなんでしょうね。

記： 確かに！どれも自然が好きだからこそって感じがしますね。

藤本さん： あとは、自衛隊医官としての仕事もしていました。

実際に地震が起こった現場で、ハイパーレスキュー隊の人たちと一緒に被害に遭った方の救助活動に携わったこともあります。救助される命、犠牲になる方、危険な現場での命がけの救助活動といった場面に直面することによって、命というものについてとても考えさせられました。

記： そうだったんですか・・・それは、とても貴重な経験ですね。すごいです。

藤本さん： そうですね。本当に、学生時代や自衛隊での体験なども含めて、いろいろな経験が今の私に繋がっていると感じます。

（注1）オリエンテーリング...野外で行う運動競技の1つ。地図と磁石を使って、指定された地点を見つける

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう！！](#)（ぜひ、お聞かせください）

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)
▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)
▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いた
オンリーワン・ワード
集



、そこを通過して、いかに早く目的地に着くかを競う。



▼ [購入する](#)
▼ [詳しく見る](#)

<<PREV

NEXT >>

インターネットのお仕事人辞典

若者の視点で伝えるオンリーワンな生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > インタビュー

[[English](#)]



5. 日本の緩和ケア医療は、現在進行形！

<<PREV

NEXT >>

記： お仕事をされていて、つらくなることはありますか？

藤本さん： そうですね、前に講演をやったときも同じ質問をされました。いつも心配されますが、みなさんが思っているほどストレスはたまっていないと思います。なぜならやりたいことをやっているから。仕事と自分の興味が一致してるんです。生活の糧（かて）のための仕事というよりは、本当にやりたいことをやっている。

みなさんが取材されるような人は、仕事がやりがいに直結している方が多いんじゃないですか？その方たちの話を聞いていると、仕事の大変さを客観で測ることは出来ないと感じませんか？仕事にやりがいを持っている人たちって、いくらでもそこにのめりこめる力があるんですよ。パワーを持っている。自分のやりたいことと仕事があまく合わさると、すごく仕事ってやりがいのあるものになるんです。だから、ついつい、やりがいがありすぎて、ちょっと休まないと思っても止まらないときがあります。強がり言ってそのうちばたっと倒れたりしたら笑ってください（笑）。

記： 今、実際にお話を聞いて、私が想像していた緩和ケアというお仕事は、一般的に思われているイメージにとらわれすぎていた感じがしています。

藤本さん： みなさんの質問を聞いていると、一般的に人の死と向き合う仕事に対して持つイメージがそのまま出てるなと思います。そのイメージのままだと、確かにストレスもたまると大変だと思います。やっぱり、最初から今の私のようなとらえ方ができる人って少ないと思うから、そこが緩和ケアの難しいところなんです。私はたまたまやりがいを見出しているし、そういう先生も何人かはいらっしゃるんだけど、やりがいに気づくチャンスがまだまだ少ないんです。緩和ケアの受け皿が、点から面になるためにはやりがいからだけではなく、まずは仕事として緩和ケアの世界に入ってきてもらう人たちも必要なわけですね。この仕事を広げていくためには、そういう人たちに間を埋めてもらわなければならない。やりがいは後付けで得られてもいいと思います。そのために、一般的に思われがちな緩和ケアに対するイメージをまず改善していかなければいけないんです。医療の世界でも、緩和ケアに対する認識がいきわたっているわけではないんです。みなさんの質問に、今の私の課題がいっぱい出てるなあと感じました。

記： そうですね、私も藤本さんを紹介されるまでこういうお仕事があるということを知りませんでした。もともと、緩和ケアは海外から来たものなのですか？

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう！！](#)（ぜひ、お聞かせください）

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)

▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)

▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いたオンリーワン・ワード集



藤本さん： はい。発祥の地である西欧とは、宗教観や文化の背景が違うから、まったく同じやり方は出来ないけれども、日本には日本流のやりかたがあると思うんです。そして、それが今だんだん形になってきていると思います。

記： 日本においてはまだ発展途上なんですよ、きっと。

藤本さん： 途上だから面白いんですよ。出来上がった状態じゃないから、いろいろな発展の余地があって、みんなの発想が生きていくんです。一定のパターンに絶対にはまらない。患者さんは1人1人で違う。今は医療もマニュアル化された部分が多い時代になっているから、若い先生はマニュアル化された医療をやりがちなんです。だけど、決してそうでない部分って人間にはあるでしょ？生産ラインに乗ったもの組み立てていくばかりでなく、そこにアクセントをつけていく楽しみをみつけていくという仕事がこれからは大事な、と思うんですよ。

記： なるほど、そういう考え方も出来るんですね。

これからはどのように活動していきたいと思っているのですか？

藤本さん： 医療者に対して、市民のみなさんに対して実際に緩和ケアを受けられた患者さんにご家族の様子を発信していくことが私たちの義務だと思います。それを若い医学部の学生さんが聞いてくれることにもすごく意味がある。医学部の教育のなかで、なかなかここまでのことは出てこなかったんです。私も、緩和ケアと出会ったのは実際に医者になってからでしたから。

日本は、昭和30年代くらいまでは家で亡くなる方が多かったんですよ。だけど私が子供の頃、高度経済成長になってからは家で亡くなる人はほとんどいなくなってしまった。ガンで亡くなる方が100人いるとしたら、そのうち在宅で亡くなる方はたったの6~7人なんです。一般の市民の方に講演する一方で、やはり毎日の診療をこつこつと続けていることが、私たちの課題への大切な解決策です。家で看取ったという患者さんが少しでも増えてくれば、患者さんと一緒に過ごしたことで得たものを持った世代がまた育っていく。そしてその経験をもとに、自分も在宅で残された時間を過ごすことが出来るようになって思えるようになる。

同時に、そういう経験を目の当たりにすることで、命の大切さがわかっていく。今、殺人事件のニュースってとても多いですよ。命の重さがよくわからない時代になってしまった。在宅死だと、子供が見ているんです。少しずつ、おばあちゃんおじいちゃんの変化していく姿を見てお別れをしたことで、病気の複雑なことはわからなくても、幼いながらに人の生き様が鮮明に記憶に宿る。それをきっかけに自分の生き方も考える人が増えるんです。そうすれば、みんなが優しい世の中に少し近づくんじゃないかなって思います。それはちょっと高い理想だけど、でもこつこつそれをやること大切なんじゃないでしょうか。

核家族（注1）化が進んでいるから、これからの在宅医療は難しいと言われているけれど、とくにこのガンの緩和ケアというのは、お年寄りの介護のなかでも時間が限られているんです。だからこそ、働いていたり1度家を出た家族でも、1~2ヶ月なら戻ってみようという方はたくさんいるんですよ。そういうご家族の力っていうのは、まだまだ

潜在的にある。核家族になって、お年寄りや高齢者だけの世代であっても、ご家族の助けで乗り切っている方はたくさんいるから、これからも続けていけば変わるんじゃないかなって思います。こればかりは人任せでは出来ない。家でいくら他人の助けを手厚く利用できるような制度が整ったとしても、そればかりでは足りない。やっぱり家族と患者さんが同じ時間を過ごすことに家の意義があるんです。それは出来るだけ叶えていきたいと思っています。

(注1) 核家族...1組の夫婦とその子供を1つの単位として指したもの。

<<PREV

NEXT >>

インターネットのお仕事人辞典

若者の視点で伝えるオンリーワンの生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > インタビュー

[[English](#)]



6. 今の時代だからこそ、強い自分でいてください。

<<PREV

NEXT >>

記： ご自身の仕事に本当に誇りを持っていらっしゃるんですね。緩和ケアは、ご自分の天職だと思いますか？

藤本さん： 思いますね。まさに天職、出会った！という感じ。

記： 言い切ることが出来るのは素敵ですね。

藤本さん： やっぱり、やってみるまでわからない仕事ってたくさんあるし、しばらくはくじけそうになることも辞めたいと思うこともたくさんある。だけど、やっていくうちに、その仕事の中でも自分に合っているところがわかってくる。だから、あんまり始めの意思を貫き通すのもだめかもしれない。1回やった仕事の中で自分の居場所が上手く見つかって、自分にしかこの分野は出来ないかもしれないとか、そういうのがピツとくるときがあるから、ピツと来たときに逃さないように、大事にすること。それぞれの人に違ったタイミングがあるからね。

記： そうですね、きっと自分でしか気付けないことですよ。

藤本さん： 押し流されているばかりでなく、自分なりの意識をもってると、そのタイミングに気づけるんだと思います。ぜひ、いい仕事をつかんでください。あんまり肩に力を入れすぎないでね。やっぱり最初の1、2年を無理なく、肩に力を入れすぎないようにやったら、その先に、5年や6年やったところで自分のペースが出来ると思うんですよ。



。私も緩和ケアをより深くやろうと思ったのは医者になって7、8年たった頃でしたから。

記： 取材活動をしていて、やっぱり最初から生きがいを見出した仕事に就かれている人はほとんどいなくて、途中での方向転換もありなんだなということが実感として湧いています。だけど、社会人への道が近付くことはやはり不安ですね。

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)
▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)
▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いたオンリーワン・ワード集



藤本さん： 仕事を変えることがわりと普通の世の中になってきましたね。反面、良くない仕事の辞め方、変え方もそんなに目立つことなく出来るようになってしまった。どういう気持ちを持って職を変えるのか、が私は一番大事だと思います。逃げて変えちゃダメだと思うんです。そういうことをすると、だんだん解決力が失われていくんです。だから、職を変えるなら自分をさらに高めるための職業選択をしてほしい。今の時代、みんな打たれ弱いて言われてるじゃないですか。その中でも、ぜひ自分の意志を見失わずに強い自分であり続けてください。これは、私からのリクエストです。

それともう1つ、支えてくれる人をちゃんと見つけること！女性でも仕事に生きていて人が増えていますが、弱音を聞いてもらえる誰かをちゃんと見つけて、つらくなったときにその人に背中を押してもらってください。逃げるんじゃなくて、前に進むために。私もこういう仕事をしていて、ときにはつらいこともあります。自分たちが思うことと違う解釈をされてしまうときは、とても残念で落ち込みます。そういうときに、同僚であったり先輩であったり、家族に話を聞いてもらおうと、すぐ頑張り直せる。聞いてもらえないとそこで壊れちゃうんじゃないかってくらい違いがあるんですよ。そういう存在を上手く見つけて、いいお仕事をしたいってほしいなって思いますね。

私自身は弱い人間です。痛みに弱いから痛みを取る仕事をやっているんです。人と上手く付き合っていこうという意識はすごく強いんですが、しくじったときはダメージは大きい人間なんです。だけどそのダメージを助けてくれる人たちがいるからこの仕事をやっている。

それと、ときどき自分を客観的にみでみること。あんまりはまりこんでしまうと自分自身が見えなくなるから、ときにはクールに頭を冷やしてみる。患者さんのご家族にもよくアドバイスするんだけど、絶対患者さんを立てなきゃいけないんだ、絶対助けなきゃいけないんだ、絶対答えてあげなきゃいけないんだって、絶対ばかりじゃ壊れちゃう。ときには、ここが限界なんだって自分で線を引いて、そこまで頑張ればいいのか、それはそれでも、やらないよりはやったんだって自分の評価の仕方も大事なんだと思います。100点を目指したら壊れます。人生において満点はないんですから。

記： その言葉を聞いて少し安心しました。私も肩に力を入れすぎずに頑張ります！ 本日は貴重なお話をありがとうございました。

<<PREV

NEXT >>

インターネットのお仕事人辞典

若者の視点で伝えるオンリーワンな生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > 記事を読んだら、感想を送ろう！

[[English](#)]



記事を読んだら、感想を送ろう！

記事を読んでみて、どんなことを感じましたか？ 思いましたか？ ぜひ、自分の思ったこと・感じたことを教えてください。記事を書いた学生記者も、お話をしてくださったナビゲーターも、みなさんからの感想を心より楽しみにしています。

(*)は必須項目になります。

お名前(*)	
ペンネーム (ありましたら)	
メールアドレス (半角) (*)	
性別	男 女
年齢 (半角数字で) (*)	歳
学校名・学年 (ご職業)	
都道府県	□□□
キャリアナビを知ったきっかけ	
なぜこの記事を読んだのですか？	人に興味があったから お仕事に興味があったから たまたま その他
記事は面白かったですか？	おもしろい 普通 つまらない
記事は役に立ちましたか？	役に立った 役に立たなかった
ご意見、ご感想(*) (1200文字以内)	

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)
▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)
▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いたオンリーワン・ワード集



こんなお仕事の記事を読みたい！というのがありましたら教えてください	

※ こちらのフォームで送信できない場合は、お手数ですがfeedback@carinavi.orgまでお願い致します。

※ なお、お送りいただいた感想の一部は、事務局での内容確認ののちWebサイト上の

- トップページ『インスパイアされた読者の感想』コーナーにて、掲載します。お楽しみに☆

※ こちらからご提出いただいた個人情報は、他の目的には使用いたしません。詳細につきましては、[個人情報に関する規約](#)をご覧ください。

▼ [購入する](#)
▼ [詳しく見る](#)



若者の視点で伝えるオンリーワンな生き方辞典

[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > ナビゲーター：藤本肇さん [在宅緩和ケア医]



[[English](#)]

仕事への厳しさと患者さんへの優しさ それをあわせ持つ柔軟さ

藤本肇さん
[在宅緩和ケア医]



取材日：2009年06月26日

ふじもとはじめ 1967年、兵庫県生まれ
幼い頃から医者への道を志し、防衛医大で自衛隊医官(じえいたいいかん)や外科医としてご自身の道を探る中で、在宅での医療の必要性を感じ、緩和ケア医の道へと進んでいくことを決める。3年半前に、「ふじもと在宅緩和ケアクリニック」を開業し、まだ広まりの浅い緩和ケアという医療の考え方を様々な方向から人々に発信している。活動的な一面を持つ一方で、穏やかで落ち着いた雰囲気からはやわらかい人柄が感じ取れる。

▼オンリーワン・ワード▼

学生記者が本取材を通じて最も心に響いた言葉

やりがいがありすぎて止まらない

by 担当学生記者：辻瑞恵(19歳：取材時)



1. [実は身近な「在宅緩和ケア医療」](#)
2. [きっと、全部が今に繋がっているんです。](#)
3. [気付いていますか？家族の絆に。](#)
4. [自然が好き。自然と人の命に触れた、学生時代。](#)
5. [日本の緩和ケア医療は、現在進行形！](#)
6. [今の時代だからこそ、強い自分でいてください。](#)

インタビューの感想

▼記事を読んだら、感想を送ろう!! (ぜひ、お聞かせください)

▼[学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼[藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼[フリーワードで探す](#)

▼[全ナビゲーター一覧](#)

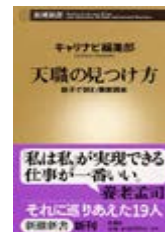
▼[もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼[購入する](#)

▼[出版への思いを読む](#)



▼[購入する](#)

▼[代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いた た オンリーワン・ワード 集



▼ [購入する](#)
▼ [詳しく見る](#)

Copyright © 1999 NPO 法人キャリアナビ All rights reserved.
network system + data center supported by Eit-ise



[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > [ナビゲーター：藤本肇さん \[在宅緩和ケア医\]](#) > インタビュー

[[English](#)]

2. きっと、全部が今に繋がっているんです。

<<PREV

NEXT >>

記：先ほど藤本さんのおじいさんもガンで亡くなったとおっしゃいましたが、医者になろうと思ったきっかけには、やはりそのようなことが関係しているのでしょうか。

藤本さん：そうですね、きっかけはたくさんありますが、それも1つにあります。

医者になろうと思ったのは小学生の頃からです。私の姉が知的障害児（注1）で重い自閉症だったので、子供の頃は友達から姉の病気のことを言われていました。姉の病気を治せれば、と思ったのが一番始めにあるきっかけです。

緩和医療に入ろうと思ったのは、大学を出て研修医の頃に、再発した患者さんの痛みの治療について、勉強して発表をしたことがきっかけです。ガン告知の問題や、術後のQOL（注2）を大事にする外科の医療はどういうことなのか、ということはずっとテーマにしてきました。そうしているうちに、このテーマが私のライフワーク（注3）になりました。また、医者になったとき同僚のナースが、若くして舌ガンで亡くなってしまったんです。そういう経験もあわせて、本気で緩和医療に取り組もうと思いました。

何年も外科医をやっていると、死期の近い患者さんといかに向き合うかという中で、だんだん緩和ケアの先生たちに頼むことが増えてきました。たまたま近くに緩和ケアの病棟が3ヶ所あったので、そこの先生とやりとりもしました。そんな中やっぱり入院は嫌だっという人がいたんです。在宅の先生はとても少ないので、家に帰りたく願う患者さんをどうやったら家で診てもらえるのかなとすごく悩みました。

最初に在宅で治療することになった患者さんが病院を退院するときに、私も一緒に家まで行かせてもらったんです。そのとき初めて在宅の緩和ケアの存在を知りました。あいさつをして、言葉を交わして、この人すごいなと、その先生にとっても感銘を受けました。それから、少しずつその先生の往診について回るようになったんです。そうしてしばらく学んだあと、在宅の緩和ケアを行う先生が本当に少ないので、じゃあ自分でやろうと思い、外科医を辞めて今の診療所を始めました。今では、外科の先生から患者さんを紹介されることもあるので、立場は逆になりましたね。

記：そうなんですか。お仕事を变えるのに、すごくエネルギーは使いませんでしたか？

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)
▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)
▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いたオンリーワン・ワード集



藤本さん： 外科にいながらずと自分で取り組んできた、ライフワークの延長上の仕事だから、ごく自然な流れでしたし、外科医を辞めるということにもそんなに抵抗はなかったです。今振り返っても、外科をやっていたからこそ、この仕事があるし、すごく外科医時代の経験が活きていると思います。メスを握っているか握っていないかだけの違いで、診ている患者さんは同じです。見た目は変わっているけれど、やっていることは自分の中では一貫しているんですね。

(注1) 知的障害児...一般的には読み書き、計算などといった日常で使う言語や学習の知的機能に障害があるとされる子ども。

(注2) QOL...Quality of lifeの略。個人の生きがいや、生活の質を大切にしていこうという考え方。

(注3) ライフワーク...作家や研究者、表現者たちが人生をささげたテーマ。天職。

▼ [購入する](#)
▼ [詳しく見る](#)

<<PREV

NEXT >>



[トップページ](#) > [インターネットのお仕事人辞典\(R\)](#) > ナビゲーター：藤本肇さん [在宅緩和ケア医] > 学生記者の感想

[[English](#)]

学生記者の感想

▼担当学生記者

辻瑞恵 (19歳：取材時)

▼取材日

2009/6/26(金)

▼取材時間

19:00~20:30

▼取材地

ふじもと在宅緩和ケアクリニック

▼取材の雰囲気

当初、私たち学生記者はそのお仕事内容にそろってとても緊張していました。

そんな私たちの緊張を察してか、藤本先生はとてもやさしい空気を終始作り出してくださり、白を基調とした家庭を思わせる事務所で、穏やかな雰囲気のもと取材を行うことができました。



やりがいがありすぎて止まらない

担当学生記者： 辻瑞恵(19歳：取材時)

で自身の仕事について、そう語る藤本さんは本当に生き生きとしていて、仕事を楽しくやってらっしゃるんだと思いました。自分のやりたいことと仕事が一致しているから言うならば仕事が趣味であってストレスは溜まらない、お仕事内容を垣間見ているからこそ、そう言い切ることがすでと思いました。今まで何人かのナビさんにも会ってきましたが、根本のところはみんな 変わらない、通じた考え方がある。それはたとえ一見かけ離れているように見える 職業でも同じなんだということが、今回の取材を通して改めてわかりました。理系で、今まで医療系など全く交流のなかって私にとって、この取材を通して聞けたお話はすべて新鮮で刺激的なものでした。そのなかでも藤本さんにお話を伺えたことを光栄に思います。本当にありがとうございました。

死をただ暗いだけのものと思わない

同行学生記者： 山本真理子(21歳：取材時)

取材は、本当に貴重なお話ばかりで、そして始終なんだか温かい時間が流れていたなと私は感じました。オンリーワンの言葉を聞いたとき、私は本当に本当に驚きました。私にとって、死は当然暗いものであるという固定観念があったからです。今まで私が見てきた“死”はとても暗くて、悲しくて、立ち直れないものばかりでした。しかし、藤本さんのお話を伺っていると“死”の違う側面が見えだしてきました。緩和ケアの患者さんは、残された人生を、家族とのんびりと一瞬一瞬を大事にかみしめるように過ごしているのだなと感じました。いつか“終わり”があるからこそ、本人やその家族は、色々なものの大切さや本当に大事なものがクリアに見えてくるのかもしれない。このような貴重なお話が聞けたこと、本当に感謝しています。ありがとうございました。

インタビューの感想

▼ [記事を読んだら、感想を送ろう!!](#) (ぜひ、お聞かせください)

▼ [学生記者の感想](#)

もっと調べる

▼ [藤本肇さんの本](#)があるか調べる

他のナビゲーターを探す

▼ [フリーワードで探す](#)

▼ [全ナビゲーター一覧](#)

▼ [もっと詳しく探す](#)

キャリアナビ・インタビュー本



▼ [購入する](#)

▼ [出版への思いを読む](#)



▼ [購入する](#)

▼ [代表の前書きを読む](#)

キャリアナビ・心に響いたオンリーワン・ワード集



打たれたときに支えてくれる人を見つける

同行学生記者： 渡辺早紀(22歳：取材時)

藤本さんは緩和ケアの仕事は、楽しくて趣味のようにやっているとおっしゃっていました。人の死を最後に看取るというお仕事の方からそのような言葉がでてくるのが、とても驚きました。死を暗いものに考えるのではなく、時間を大事に最期に何が出来るかを家族で考えて、たくさんの思い出を作って皆で送り出すというその過程に喜びを見出している方でした。

そんな藤本さんは、仕事で辛いときに弱音を聞いてもらえる先輩だったり同僚だったり家族だったり仲間を見つけるといい、とおっしゃっていました。そういう人たちが私の周りにも今いてくれることが本当に有難いし感謝の気持ちが溢れてくるし、その人たちを大事にしたいと本当に思いました。